

第2話 受験方式を考える

第1話でも触れましたが、今回は少し具体的な入試科目についてお話しします。

先述の通り、帰国入試は、「英・国・算」の3科目、「英語のみ」、もしくは「国・算」の2科目をいずれかを選択し、それに加えて面接というのが一般的です。それぞれについて考えてみましょう。

まずは、「英語のみ」という形態について。帰国生はどれくらいの英語力を持っていれば、英語受験を考えるべきなのでしょう。

帰国生の英語力を測るとき、よく英検が引き合いに出されます。学校の募集要項に、「英語の試験は英検～程度の問題です。」と明記されていることもあります。ただし大前提として、英検の級を持っているから受験に有利・不利といったことはありません（ごく一部の学校を除いて）。また、それが受験資格になることもありません。あくまで、過去の合格者たちがどの程度の英語力を持っていたかや、入試問題の難易度を示す指標に過ぎません。とはいえ、実際に受験生たちを見ていると、英検という基準が一定の説得力を持っていることは確かです。

では、英語単科で受験を考える英語力とはどの程度でしょうか。...ずばり準1級程度の英語力と言えるでしょう。

繰り返すようですが、準1級を持っていたからどの学校に受かる、持っていなければ受からない、ということではありません。では、どういうことが言えるのでしょうか。

英検2級あたりまでは、現地校で生活するうち、自然と届くようになります。特別な対策はせず、地力だけで合格する子も多いです。

これが準1級になると、一つ壁を感じることもあるのではないのでしょうか。単語のレベルも、文法、そして長文の内容も、グッと難しくなります。

特に言えるのが、扱う文章の「カタさ」です。

英検はそもそも、大人向けの（少なくとも小学生向けではない）試験です。当然、文章の対象年齢も上がってきます。簡単に言えば、子供にとって面白くもなんともない、何の話なのかも分からない問題になるのです。それをスラスラ読み解ける知識や経験、そしてもちろん英語力が必要になってきます。

図らずとも英検は、子どもの「オトナ度」の基準にもなっているのです。単語・熟語を反復して勉強できる体力があるか。社会や時事に興味を持ち、自分で考えるような作業をしているか。帰国生に限った話ではありませんが、精神的な成熟が本番入試にも作用していることは、間違いがありません。

（実際に難易度の高い学校では、社会性のある文章が好んで出題されます。）

ただ実際の英語力は、滞在年数や生活環境に大きく左右されるため、本人の努力ではどうにもならない壁がある、とも言えます。

さて、それに対し国算受験はどのようなものなのでしょう。

一般入試にも2科目受験はありますが、帰国入試のそれは一般入試ほど難しい問題が出題されるわけではありません。しかし、帰国生にとってはそれなりに難易度の高いものになります。なぜでしょうか。

現地校に通えば、普段の授業や宿題だけでも大変な苦労があるでしょう。それに加えて日本の受験勉強をすることは、とても努力のいることです。

日本の子ども達が普段耳にする言葉、目にする漢字、自然な文法知識といった土台を持ってないぶん、国語力にも当然不利があります。また現地校の算数は、残念ながら受験勉強の役に立ちません。1/3はイチぶんのサン（one third）なのです。

ただし裏を返せば、そういったハンデを鑑みて設置された帰国入試なのですから、しっかりと国語・算数を勉強していれば、それだけで大きな武器になるということでもあります。

ここで英語圏の子どもたちのライバルとなるのが、アジア勢です。一つ、データを見てみましょう。平成27年度の調査では、北米に在留している小学生が17267人。そのうち、日本人学校に通っている子どもは407人とのことです。アジア圏で見ると、同じく小学生が23501人、日本人学校はなんと12733人いるそうです。

つまりアジア圏では、日本語環境で勉強している子が英語圏に比べて圧倒的に多いということです。これが国・算受験にどのような影響があるかは、想像に難くないでしょう。

しかしその反面、アジア勢は英語の絡んだ受験をすることができません。

それを考えると、「英・国・算」バランス型という存在も重要なものになってきます。3科受験の英語は英語受験ほど難しくはないが国語と算数も勉強しなければならない、まさに中間的な存在です。出願時期になると、英語か3科目のどちらで受験をするか、という相談も多く出てきます。総合的な達成度を見て、じっくり検討しなければならないでしょう。

いかがでしょうか。このように帰国入試は奥が深いようにも見えますが、まずは「しっかり勉強すること」です。すべき受験は、結果として見えてきます。

せっかくの海外経験ですので、帰国入試ありきでレールを敷くのではなく、子どもにとってよい経験と成長の先に、帰国入試が在りますように。

著者：谷口 仁
Apr 13 2016